

2004年2月

未就学児を持つ母親へのアンケート調査結果からみた 「ママ友」の友人関係と通信メディアの役割

第一生命保険相互会社(社長 森田富治郎)のシンクタンク、第一生命経済研究所(社長 石嶺 幸男)では、未就学児を持つ母親 696 名を対象に、標記についてのアンケート調査を実施いたしました。

このほど、その結果がまとまりましたので、ご報告いたします。

目次

アンケート調査の実施概要	1
【電子メールの登場によるコミュニケーションの変化】	2
【育児期における母親の出会いの場と関係維持】	3
【ママ友に対する考え方】	4
【ママ友の人数】	5
【ママ友とストレス】	6
【通信メディアの利用状況と利用感】	7
【コミュニケーション手段の優先順位】	8
【話題別の通信メディア利用状況】	9
【通信メディアに対する考え方】	10
【研究員のコメント】	11

「ママ友」とは、子どもを介して知り合った育児期の友人関係のこと

*この冊子は、当研究所発行の調査月報、「ライフデザインレポート」の2月号の要約です。
「ライフデザインレポート」を2月号ご希望の方は、
右記の広報担当までご連絡ください。

お問い合わせ

株式会社第一生命経済研究所
ライフデザイン研究本部
研究開発室 広報担当 / 岸
〒100-0006
東京都千代田区有楽町 1-13-1
TEL . 03 - 5221 - 4772
FAX . 03 - 3212 - 4470

アンケート調査の実施概要

1. 調査地域と対象 全国の0～6歳の子どもを持つ母親
2. サンプル数 696名
3. サンプル抽出方法 第一生命経済研究所生活調査モニターとその家族協力
4. 調査方法 質問紙郵送調査法
5. 実施時期 2003年9月
6. 有効回収数(率) 631名(90.7%)
7. 回答者の属性

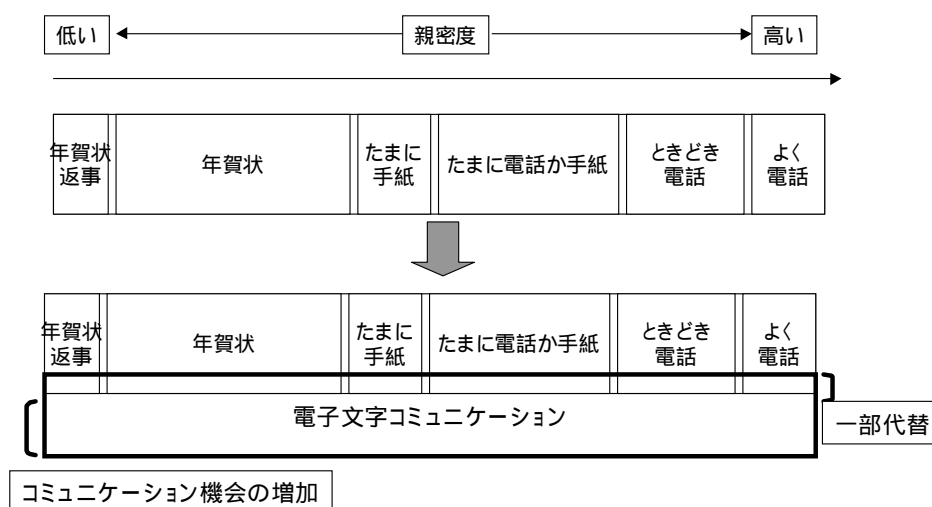
回答者属性	年齢構成	24歳以下	1.6%
		25～29歳	12.8%
		30～34歳	38.3%
		35～39歳	35.8%
		40歳以上	11.3%
	職業	専業主婦	61.8%
		会社員・公務員・団体職員(正社員)	5.5%
		自営・自由業(家族従業員を含む)	2.0%
		パート・アルバイト・派遣社員・内職	29.4%
		その他	0.8%

注：「不明」を省略してあるので合計は100.0%にならない
対象者は未就学児のいる母親とした

電子メールの登場によるコミュニケーションの変化

電子メールという新しいツールは、すべての通信メディアの代替を可能とし、さらにコミュニケーション全体の機会を増加させた。

図表1 電子メールによるコミュニケーションの変化



資料:筆者作成

筆者はメールなどの電子文字コミュニケーションが現代の若者のコミュニケーションにおいてどのような作用があるのかについて研究を行ってきました。一般に、人との親密度は使用した通信メディアの種類によってある程度はかることができますが、新たに登場した電子メールなどのいわゆる「電子文字コミュニケーション」では、親密度の強弱にかかわらず通信手段として利用されていることがこの研究を通してわかりました。

また、電子文字コミュニケーションは、従来型の通信メディアを一部代替しつつ、コミュニケーション全体の機会を増加させていることもわかりました（図表1）。さらに、電子文字コミュニケーションの普及によって、これまで友人だった人とコミュニケーションをとる機会自体が増加したという結果に加えて、「電子メールならではの関係」が出現している点も確認しました。

今回、コミュニケーションへのニーズが高いにもかかわらず、物理的・時間的制約からコミュニケーションが困難ないし不十分になりがちな育児中の母親について、その実態と通信メディアの役割を明らかにすることを目的として、アンケート調査を実施しました。

育児期における母親の出会いの場と関係維持

育児中は、新たな出会いの場としてのインターネット、新たな関係維持手段としての電子メールや携帯電話が大活躍！？

図表 2 育児期における母親の関係構築の場・機会と関係維持の連絡手段としての通信メディア

	従 来	現 在
関係構築の場・機会 (ファーストコンタクト)	公園、児童館、各種子ども教室(スイミングなどの習い事を含む)、育児サークル、病院の待合室	+ インターネット (ホームページ上などでの出会い)
関係維持の連絡手段 (リレーションキーピング)	加入電話、手紙	+ 携帯電話、電子メール

- { 1)ファーストコンタクト 関係の構築 : 出会いの機会・必然性
 { 2)リレーションキーピング 関係の維持 : 通信メディア

友人関係の構築と維持においては、**関係構築の場や機会**と、**関係を維持するための通信メディア**がキーワードとなります。

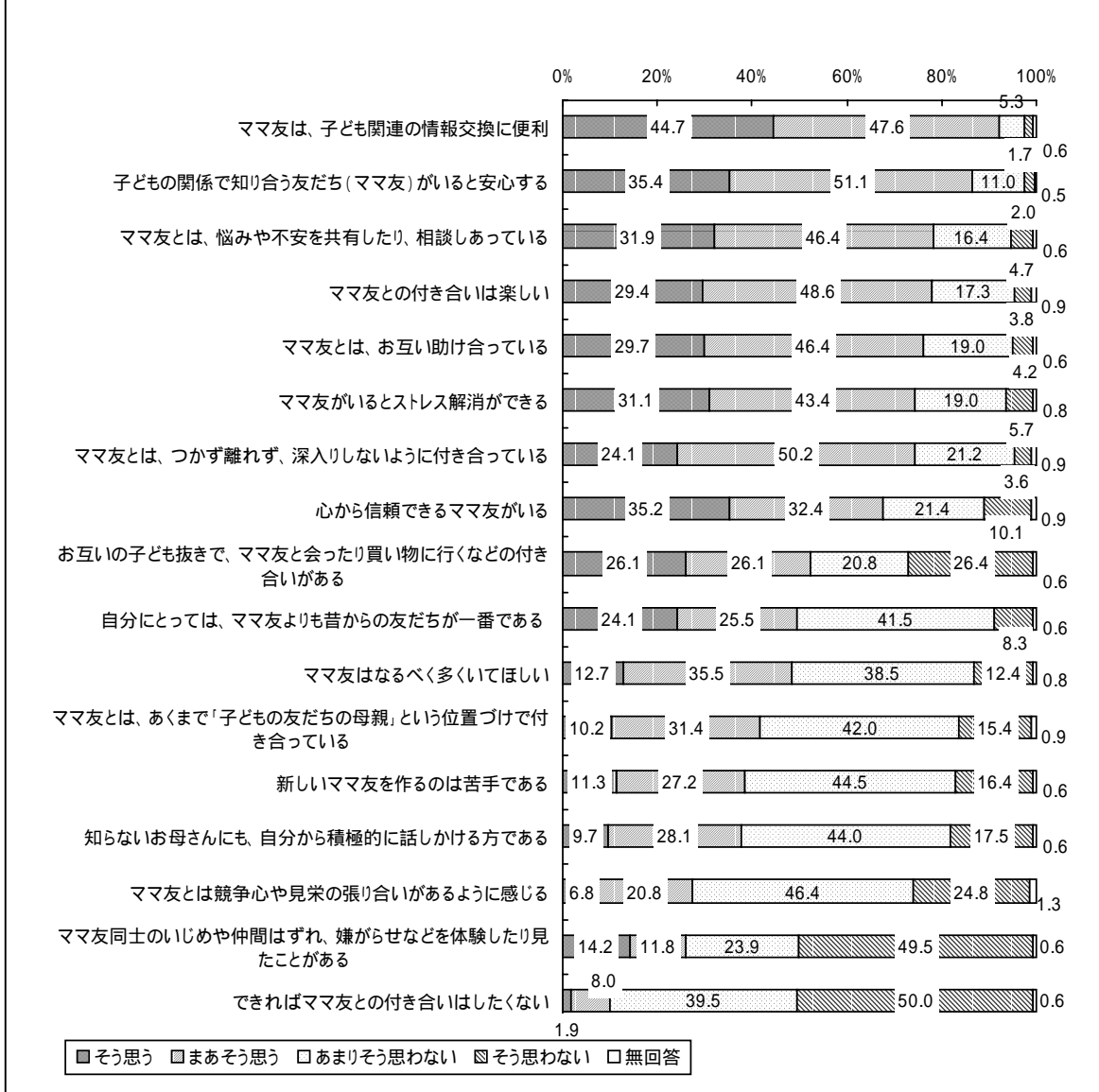
従来から育児中の母親の関係構築の場・機会として、公園、児童館、各種子ども教室などがあります。また、関係維持の手段としては、これまでは加入電話か手紙といったものしかありませんでした。ところが今ではインターネットや電子メールといった、**新たな通信メディアの登場により、育児中の母親の関係構築の場・機会が変化しつつあります(図表2)**。

例えば、ホームページ上の育児関連サイトでは、出会いや体験談の閲覧、投稿、情報提供や相談が活発です。また、インターネットでできたコミュニティのみならず、対面でできたコミュニティも、今日メーリングリストなどで簡単に維持管理できます。単に利便性の面だけでなく、例えばこれまで積極的に公園に入っていられずに友だちができなかった人や、夜にしか自由な時間が持てなかった人、特殊な趣味や価値観を共有する人たち、さらには子どもに関して特定の共通する点や悩みを抱えるような人同士が、気軽に交流できるようになってきました。加えて、仕事を持つ母親の増加により、家の電話ではなかなか連絡がとれなかった人たちとも、メールや携帯電話で連絡がとれるようになったことは、友人関係のみならず、保育園や幼稚園との連携に多大な作用をもたらしているといえます。

ママ友に対する考え方

ママ友のメリットは「情報交換」「安心」「悩みや不安の共有と相談」。

図表3 ママ友に対する考え方(全体)



子どもを介して知り合った育児期の友人関係（以下、「ママ友」と表記）に対する考え方を尋ねたところ、「情報交換に便利」とした割合は「そう思う」と「まあそう思う」の合計で9割を超えていました（図表3）。

また、「安心する」「悩みや不安を共有している」と回答した人も7～8割に上りました。

ママ友の人数

ママ友の平均人数は9.2人、そのうち特に仲良くしているのが3人程度。

図表4 ママ友の人数

子どもの関係で知り合って付き合い合っている「ママ友」 (%)	0~4人	5~9人	10人以上	平均値
	31.4	26.5	42.1	9.2人
特に仲良くしている「ママ友」 (%)	0~1人	2~3人	4人以上	平均値
	28.1	41.1	30.8	3.0人

ママ友の人数についてみると、かなりばらつきがあることがわかりました。

平均的な人数は9.2人で、そのうち特に仲良くしているママ友の平均人数は3.0人という結果となっています（図表4）。また、年齢が高く、子どもの数も多い人が必然的にママ友の数も多いという傾向がみられました（図表省略）。

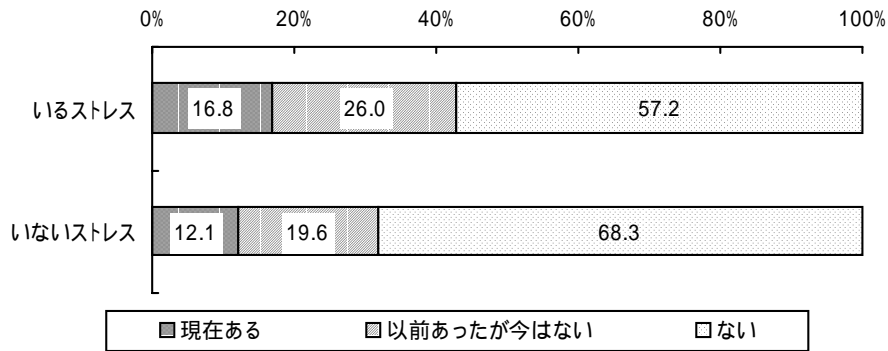
ママ友は、母親本人の年齢というよりは、子ども同士の年齢の近さによって集うことが多いため、晩産化の進む今日、母親同士の年齢差がかなりあるケースも少なくありません。年齢別にママ友に対する意識をみたところ（図表省略）、若い世代では「ママ友はなるべく多くいてほしい」としているのに対して、年齢が高いと「ママ友は、あくまで『子どもの友だちの母親』との割り切りをしている様子も明らかになりました。年齢差による考え方の相違に加えて、個人の価値観の違いがあることを鑑みると、「ママ友」のとらえ方は人によってかなり違うといえます。

今回のアンケート調査での自由回答やヒアリングの結果から、ママ友を支持する意見、否定する意見などは様々ありましたが、全体を通して、収入格差や服装の違い、価値観・しつけ観の違い、子どもの性差、しかり方などの違いで付き合いがしにくいとの意見が多くみられました。また、ママ友が切望されるのは1人目出産後であることも多々指摘されました。

ママ友とストレス

ママ友がいても、いなくても(不十分でも)ストレスは生じる。

図表5 ママ友がいるストレス、いない(もしくは不十分な)ストレス



	母親の年齢		子どもの人数		
	34歳以下	35歳以上	1人	2人	3人以上
「ママ友」がいることによるストレス	15.7	16.3	13.1	16.5	22.2
「ママ友」がいないことによるストレス	13.3	10.2	11.5	11.9	13.6

注:「現在ある」の割合

ママ友関係はしばしばストレスの種にもなります。そこで、ママ友がいると回答した人を対象に、ママ友がいること・いないこと(「不十分」を含む)の両面についてストレスを感じるかどうか聞いてみました。

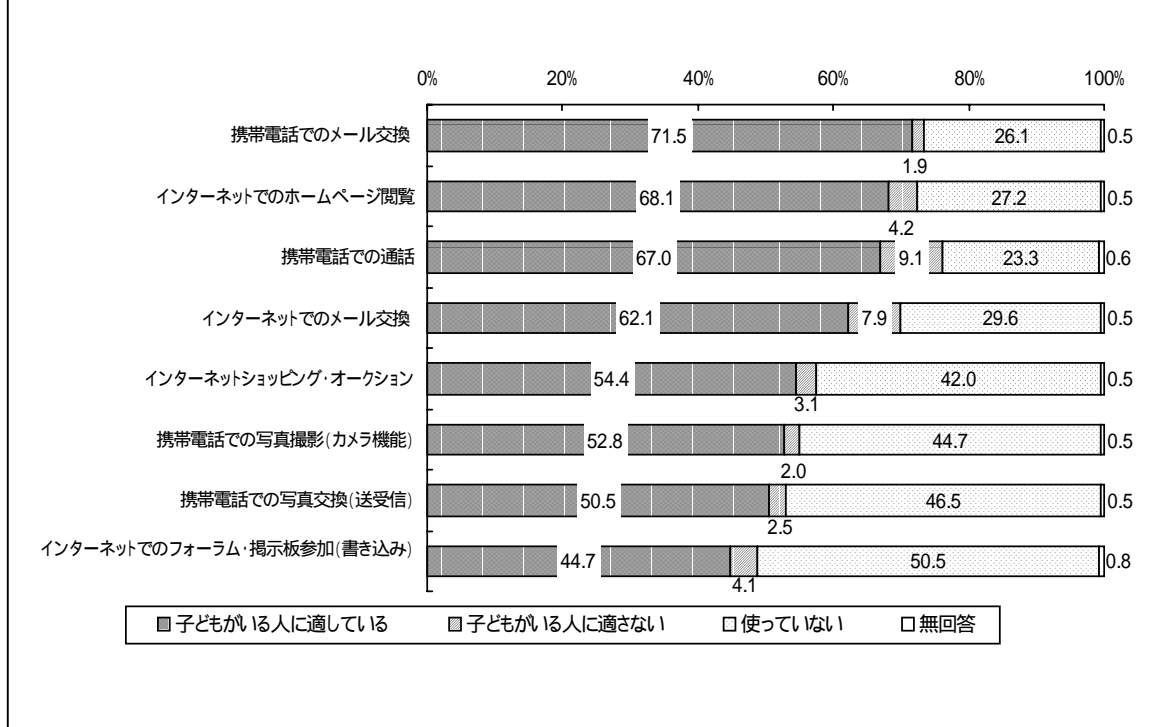
その結果、ママ友がいることによるストレスについては「現在ある」とした人が16.8%、ママ友がいない・不十分であることに対するストレスについて「現在ある」とした人は12.1%となりました(図表5)。年齢別に目立った差はみられませんでした。が、子どもの数が多くなるとママ友が「いるストレス」が高くなる傾向がみられました。

育児によるストレスは、子どもの虐待につながるなどの指摘がなされています。今日、虐待件数は年々増加していますが、これらは核家族化や都市化、就労女性が増えたこと等による人間関係の希薄化によるところが大きいとされています。また、1999年に音羽で起きた幼児誘拐殺人の「春奈ちゃん事件」も、母親同士のつきあいによるストレスの末の犯行として注目されました。この時、事件の凶悪さの裏で、犯人の殺意に「共感した」とする母親の声も多かったのは衝撃的な事実でした。排他的な母親同士の友人関係を象徴する「公園デビュー」という言葉も、一過性の強い流行語というよりは、一般用語としての市民権を得ています。子育てとストレスは切り離せない関係ですが、「子育てに関わる人間関係」もストレスの大きな一因になっているようです。

通信メディアの利用状況と利用感

未就学児を持つ母親の7～8割はインターネットや携帯電話を利用。

図表6 通信メディアの利用感と非利用者の割合



通信メディアの利用について聞いてみたところ、インターネットのホームページ閲覧で27.2% / メール交換で29.6%の人が、携帯電話での通話で23.3% / メール交換で26.1%の人が「使っていない」と回答しました。この結果から、**未就学児を持つ母親のほぼ7割から8割がインターネットや携帯電話を利用していることがわかりました(図表6)**。

「子どもがいる人に適している」と回答した割合が多かったのは、上位から「携帯電話でのメール交換」「インターネットでのホームページ閲覧」などとなっており、通話より文字・画像による情報交換の支持が高くなっています。携帯電話での通話は、利用者が多いにもかかわらず、「子どもがいる人に適している」とした割合が低いことがわかりました。

今回のアンケート調査の自由回答からでも「真夜中の授乳中に、同じ時間に授乳している友人の存在をメールで確認して力づけられた」という意見があったように、時間を問わず、相手の都合も考慮する必要なく情報発信できる電子メールは、時間的・物理的制約が大きい育児中の母親に適した通信ツールのように思われます。特にパソコンに向かわずに手元で情報の受発信ができる携帯電話でのメール交換は、その手軽さから支持が高いものと思われます。

コミュニケーション手段の優先順位

「会話」をしたいけれども、実際には時間的・物理的制約が大きくて難しい。ならば携帯電話での電子メールで「準会話」を。

図表7 コミュニケーション手段の優先順位

		平均値			平均値
1位	実際に会って話すこと	1.7	5位	パソコンを使った電子メール	5.0
2位	家の電話での会話	2.8	5位	郵便での手紙・ハガキ	5.0
3位	携帯電話・PHSを使った電子メール	3.7	7位	ファックス	5.4
4位	携帯電話・PHSでの会話	4.5	8位	チャット	7.7

注：「平均値」はあげられた順位の平均

通信メディアに対面会話を加え、コミュニケーション手段の優先順位を尋ねたところ、最も上位にあげられたのは対面会話となりました（図表7）。

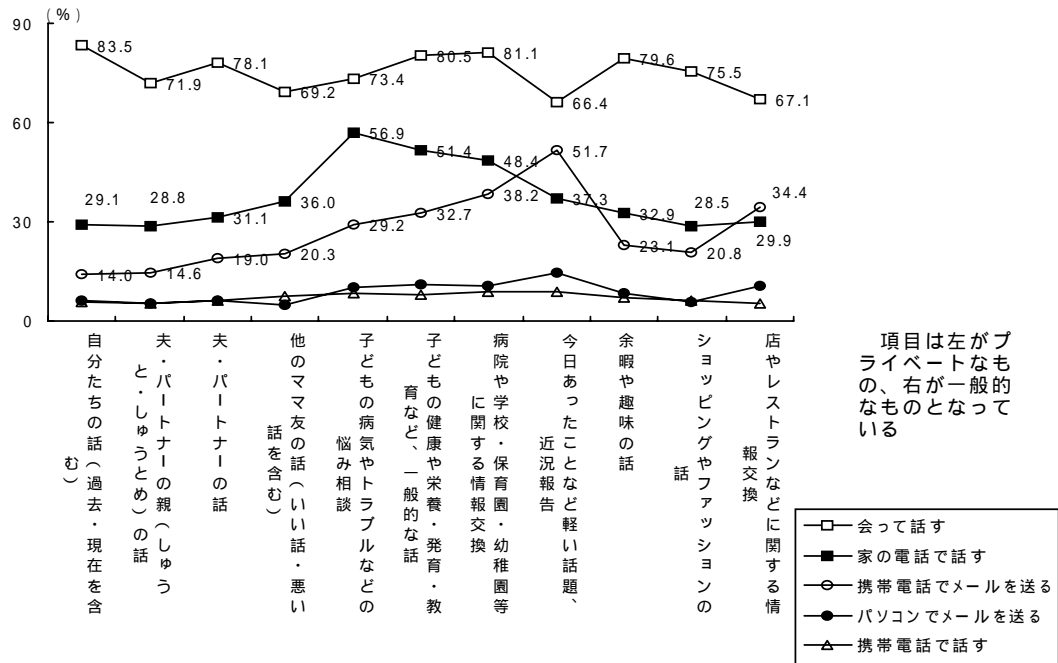
これに「家の電話での会話」が続いており、重視度としては「会話」が高い位置を占めていることがわかりました。携帯電話については、会話よりも電子メールが上位にあげられており、携帯電話は会話手段としてよりはメールツールとしてとらえられている様子が明らかになりました。また、パソコンを使った電子メールは携帯電話を使ったものより下位に位置していました。

育児中の母親は、本当のところは会話を楽しみたいところですが、時間的・物理的制約が大きく、それができないところから、電子文字での「準会話」（＝文字メッセージ交換でありながら、ある程度の即時性があり、会話に近いコミュニケーションができる）を楽しんでいるといえるでしょう。

話題別の通信メディア利用状況

軽い話題は携帯メールで情報交換、急ぎの時は家の電話で通話。

図表 8 話題別通信メディアの利用状況



話題別に通信メディアの利用状況を聞いてみました(図表8)。

その結果、自分や家族の話や子どもに関する話は、「会って話す」とした割合が最も多く、83.5%を占めました。また子どもに関する事で、特に病気やトラブルなど急を要する内容だと、家の電話で会話をする割合が高いことがわかりました。

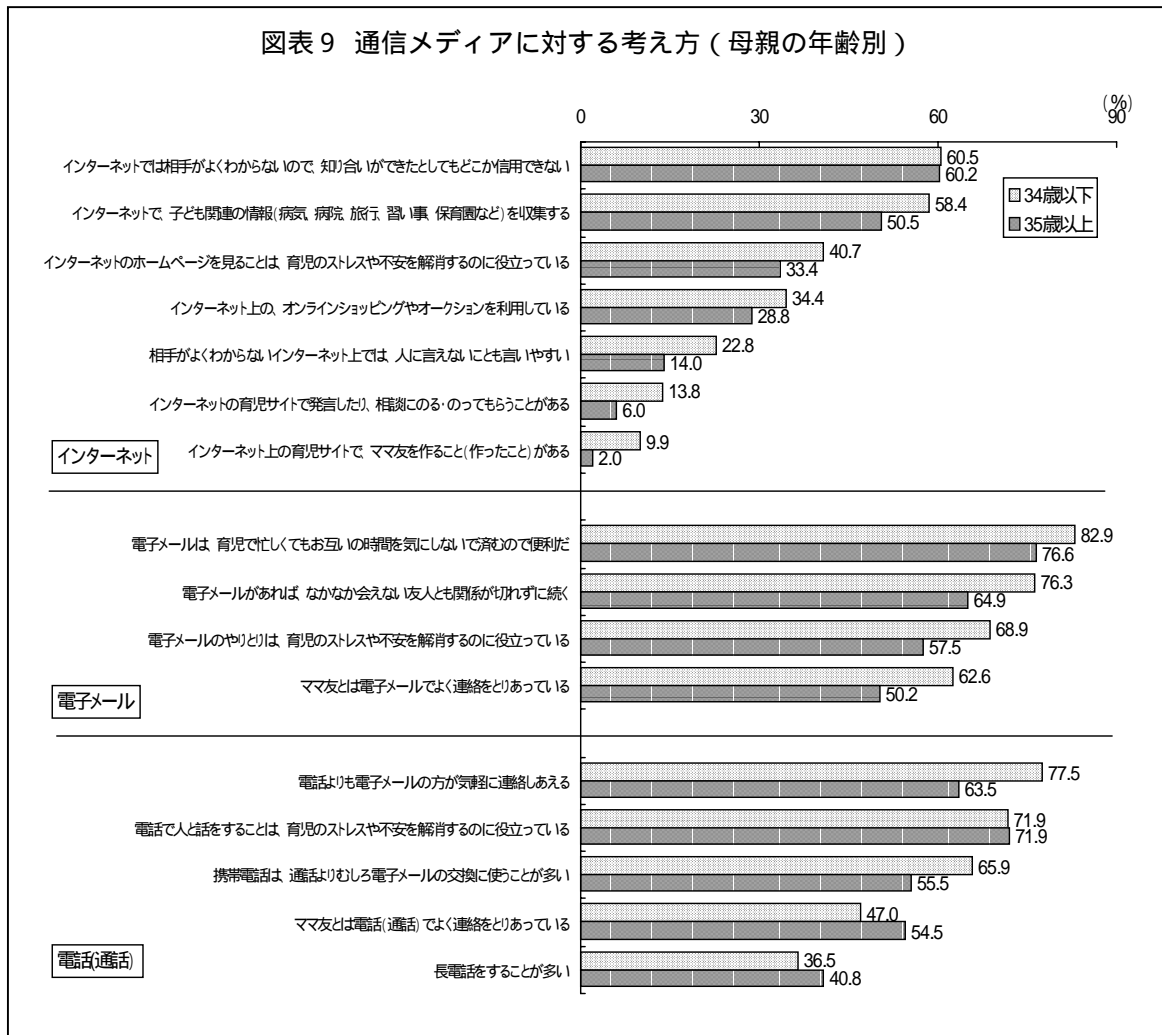
一方、今日あったことなど軽い話題については携帯電話でメール交換を利用する人が多いようです。パソコンでのメールや携帯電話での通話は、いずれの話題でもあまり利用されていませんでした。

育児中の母親は、基本的に会って話すコミュニケーションを重視しながら、急を要する時などには家の電話でも会話をし、一般的な情報交換については携帯電話のメールを多用している実態が明らかになりました。多様な通信メディアが普及した今日は、話題によってそれらが使い分けられているようです。

通信メディアに対する考え方

年齢が低い方が通信メディアの支持が高い。高年齢で支持が高いのは電話での通話。

図表9 通信メディアに対する考え方（母親の年齢別）



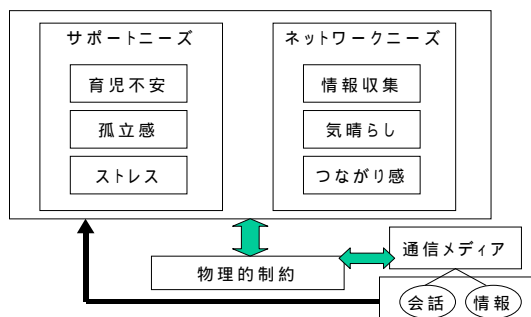
母親の年齢別に通信メディアに対する考え方を聞いてみました（図表9）。

その結果、34歳以下と35歳以上を比較すると、**全般的な傾向として35歳以上では通信メディアの利用自体が少ない**ことがわかりました。また**通信メディアに対するイメージや評価が低く、通話を重視する傾向**があります。年代によって通信メディアに対する感覚が異なる様子がここでもわかりました。

また、全体的には、インターネットでの情報収集というよりは、電子メールでの対人コミュニケーション面での活用が多いことがわかりました。さらに、電子メールや電話での対人コミュニケーションはストレスや不安の解消に役立っていることも明らかになりました。

研究員のコメント

携帯電話やインターネット、電子メールなどの通信メディアの普及は、家に閉じこもりがちで人との交流が激減しやすい子育て中の母親の対人関係維持に大きく貢献しています。気軽な交信手段によってコミュニケーション頻度が高まったことで、母親のストレスが解消されていることは事実です。さらに、「子育て」という新しいステージに立った女性が、多忙な環境下においても既存の友人との関係を維持できるようになったという点についての評価も高いといえるでしょう。



しかし一方で、「ママ友」に対するとらえ方に差異がある点、さらに通信メディアに対する感覚にも年齢などによって違いがあることが調査から明らかになりました。これらのダブル・ギャップは新たなコミュニケーション障害を生じさせており、いい時はいいが悪い時はより関係性が悪くなるといった二極化のリスクを高めています。例えば、タイムラグがあってもいいはずのメールで即答を強要されているように感じたり、あまりの交信頻度の高さが煩わしくなったりといった新たなストレスが生じているのが現状です。1日1回パソコンでメールを確認する人と、携帯電話で即時的にメールで「会話」をする人とは、明らかにコミュニケーションの仕方やルールが異なるのです。このような新たなコミュニケーションギャップによるトラブルを解消するために必要なのは、通信メディアの利用における「常識」は存在していないということを認識することではないでしょうか。さらにママ友に対しても、様々なとらえ方をする人が存在する事実を認識しておくべきです。

通信メディアはあくまで「ツール」であり、ツールの両端に人間がいて、「信頼関係」が必要であることを忘れてはなりません。安易にママ友を求め、その関係を通信メディアに依存することはかえって危険な関係を招きます。自らの「常識」を押し通した結果、生じた誤解や行き違いによって傷ついたという人も少なくないのが実状です。確かに、携帯電話や電子メールなどの通信メディアは子育て中の母親には非常に適したコミュニケーション手段です。これによって、現代の育児中の母親の友人関係は大きく変化しつつあるのは紛れもない事実といえます。ただし、通信メディアは人間関係そのものを簡単にしたのではなく、構築された信頼関係の上に成り立つものであり、人間関係の維持においてあくまでそのサポートをするツールであるということを念頭に置くことが重要です。

いかにしてこれらの通信ツールを自分の育児生活のスタイルに合わせて組み込むかを、ユーザー自身が再考することで、もっとその効用を活かし、育児におけるサポートツールとして活用できるのではないのでしょうか。 (研究開発室 研究員 宮木由貴子)